国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成29年8月1日発行　第41巻第8号通巻第479号

みんぱくは開館40周年を迎えます

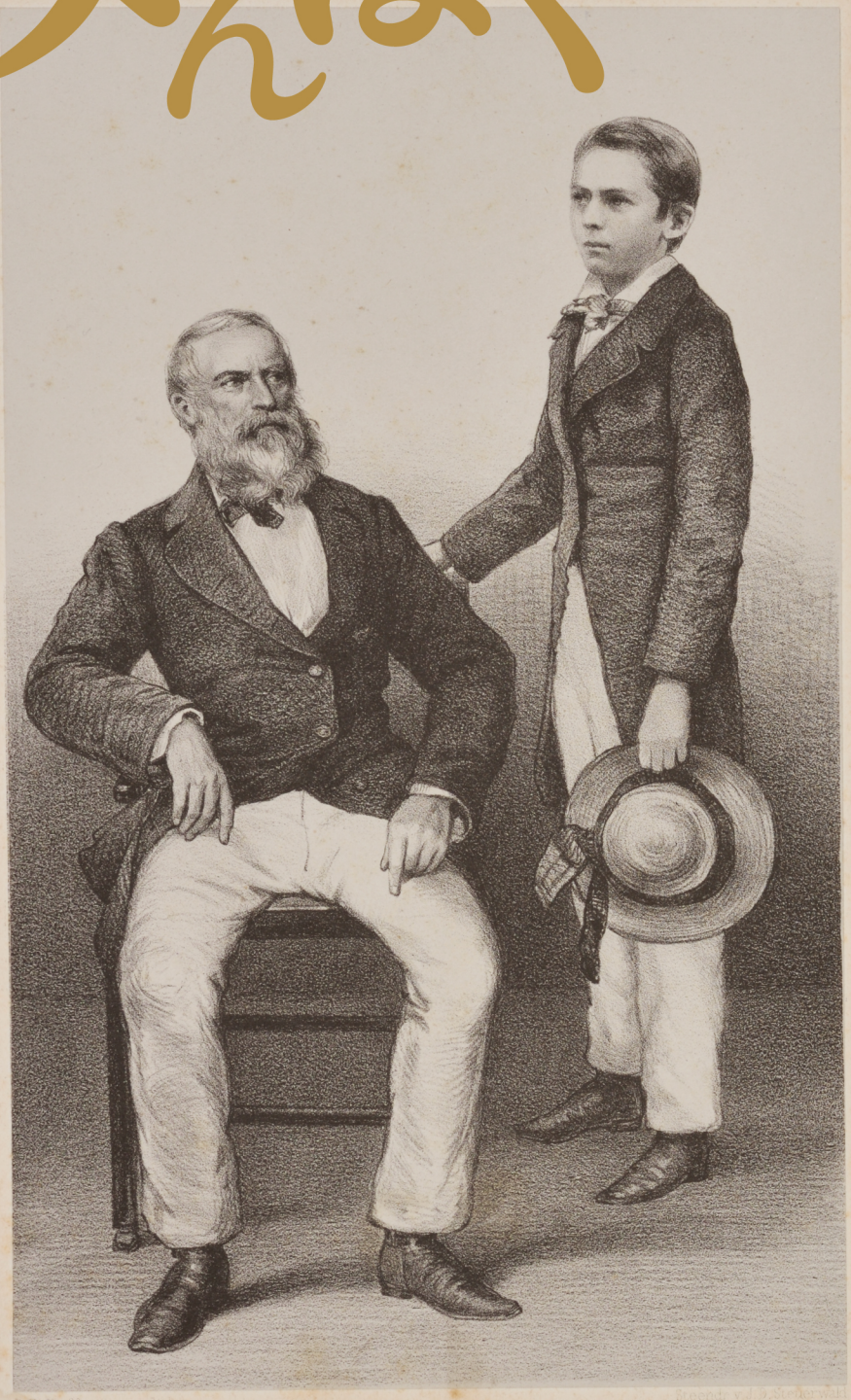
月刊みんぱく

2017 8月号

特集

シーボルトの日本博物館

「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」によせて　園田直子
観察された自然と文化のかたち　野林厚志
シーボルトが手に入れた日本の地理情報　青山宏夫
父と子が集めたアイヌコレクション　佐々木史郎



Jhr. Ph. F. VON SIEBOLD
EN ZIJN ZOON ALEXANDER.
Naar eene in Japan vervaardigde Photographie

守屋毅さんとシーボルト

熊倉 功夫（くまくら いさお）

プロフィール
1943年東京都生まれ。東京教育大学卒業。筑波大学教授、当館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任。現職はMIHO MUSEUM館長、当館名誉教授。2013年、中日文化賞を受賞。著書は『日本料理の歴史』（吉川弘文館）、『熊倉功夫著作集』全7巻（思文閣出版、刊行中）など。

民博の特別展はいつも異文化交流をテーマとしているが、その中に直接であれ間接であれ「日本」という視点が常に意識されてきた。これが日本の文物を扱う展示ということになれば、外から見た日本理解が、大きなテーマとなろう。その意味で私にとって忘れられないのは、一九九〇年に守屋毅（もりやたけし）さんが企画し実現した「海を渡った明治の民具　モース・コレクション」展である。

守屋さんは大森貝塚発見者であるお雇い外国人モースからはじまり、日本文化の観察者としてのモース、さらにモースが持ち帰ったぼう大な日本資料の全体像を明らかにした上で、厳選されたモース・コレクションを日本に里帰りさせた。この間、約一〇年の歳月が費やされている。守屋さんが心血をそそいだこの展覧会は、その後の、日本資料里帰り展の一つの規範になったように思う。

守屋さんはこの展覧会にすべてを燃やし尽くしたかのように、その終了と同時に末期癌（がん）の宣告を受け、わずか五〇日余りの闘病の後、翌一九九一年二月四日に四七歳の若さで没した。

当時筑波大学にいた私は病院で何度か守屋さんの話をきく機会があった。その中で、後に私自身に深く関係する会話があった。それは「次はシーボルトをやりたい」の一言だった。

私は守屋さんがなくなったあと、そのポストを埋めるべく民博に着任した。その二年後、突然、ボン大学教授ヨーゼフ・クライナー先生から民博での「シーボルト展」の指名を受けた。これは天上にいる守屋さんの意志に違いないと感じた。一九九六年がシーボルトの誕生二〇〇年にあたるので、これを機に、シーボルト・コレクションはもちろん、その息子ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションも加えて、父子が集めた日本資料の総合的な研究と里帰り展を開催しようという企画である。

特別展「シーボルト父子のみた日本」の開会式に私は特別な思いで一本のネクタイを着用した。それは守屋さんがなくなったその年の秋に、シーボルト調査に行く予定で買っておいたネクタイで、没後に奥様の正子さんから頂戴したものであった。

シーボルト・コレクションの研究は進み、昨年その後の成果が展観された。このたびのシーボルト展には新資料も展示され、大いに注目される。モースやシーボルトが、何を日本の中に発見しようとしたのか、という異文化交流の視点は、今後も、在外日本資料の研究と展示にきっと生かされることと期待している。

月刊 みんぱく

8月号目次

1 エッセイ　千字文
守屋毅さんとシーボルト
熊倉 功夫

特集　シーボルトの日本博物館

2 「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」によせて
園田 直子

4 観察された自然と文化のかたち
野林 厚志

6 シーボルトが手に入れた日本の地理情報
青山 宏夫

8 父と子が集めたアイヌコレクション
佐々木 史郎

10 ○○してみました世界のフィールド
タイ王国の展示を秋田へ
平井 京之介

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
北尾重政・政美の描いた「白沢の図」
佐々木 聡

16 新世紀ミュージアム
良渚博物館
韓 敏

18 手芸考
震災と手芸とコミュニティと
塩本 美紀

20 ながなんぢゃ
それも言語学者の仕事なの?
早稲田 みか

21 次号予告・編集後記

特集

シーボルトの日本博物館

昨年七月から千葉、東京、長崎、名古屋を巡回した「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」。シーボルト没後一五〇年を記念したこの展示が、八月一〇日からついにみんぱくにやってくる。当館では開館四〇周年記念特別展として開催するこの展示の魅力を、展示実行委員が紹介する。

「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」によせて

園田直子（民博 人類基礎理論研究部）

展示の概要

江戸時代後期、医師として来日したシーボルトは、日本の文化や自然にかかわる膨大な資料をヨーロッパにもち帰った。シーボルトの収集資料のうち、一度目の来日時のコレクションはライデン国立民族学博物館（オランダ）にあることはよく知られている。「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」では、これまであまり注目されてこなかった、ミュンヘン五大陸博物館（ドイツ）所蔵のシーボルト二度目の来日時のコレクション、および、シーボルトの末裔（まつえい）にあたるフォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵の関係資料をとおし、シーボルトがヨーロッパで実際におこなった日本展示を一五〇年ぶりによみがえらせる。

本展示は、国立民族学博物館も参加した人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」のうち、「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（一九世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」の研究成果と位置づけられる。同研究は、国立歴史民俗博物館を総括機関（総括責任者：日高薫（ひだかかおり）教授）とし、平成二二年より六年間、国内外の研究機関と協力のもと実施された。

展示の構成

展示は章立てになっており、第一章「日本に魅せられた男、シーボルト」では、シーボルトの生い立ちから、二度にわたる来日の経緯を概説する。第二章は「シーボルトの日本研究」である。シーボルトは長崎郊外の鳴滝（なるたき）に学塾を開き、西洋医学を教える一方、門人や知人の協力のもと、日本の自然や文化に関する資料や情報を収集した。その成果はヨーロッパで出版された『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』などにまとめられている。第三章「シーボルトの日本展示と民族学博物館構想」では、シーボルトの日本展示の沿革を、一八三二年のライデンの自宅でのコレクション公開、一八六三年のアムステルダム産業振興会館、一八六四年のヴュルツブルク（シーボルトの生まれ故郷）のマックス職業学校、一八六六年のミュンヘンの王宮庭園に面した宮殿内北部ギャラリーの順でまとめる。第四章「ようこそシーボルトの日本博物館へ」では、アムステルダムでの展示を、当時の雑誌記事のイラストから再現を試みた。また、ミュンヘンで開催されたシーボルト最後の日本展示を、長男アレクサンダーが作成したコレクション目録をもとに、展示の順序、展示ケースの区切りをできるかぎり尊重しながら復元する。最終の第五章「日本研究者シーボルトの最期」では、再渡来を熱望しながら、ミュンヘンで七〇年の生涯を閉じたシーボルトの最期を扱う。

みんぱくでの展示の工夫

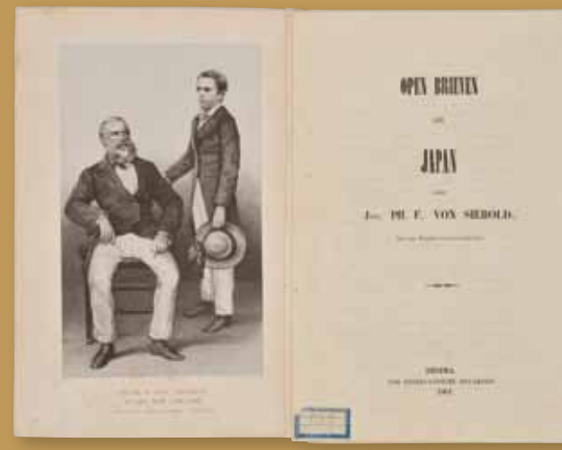
本展示はドイツからの借用資料で構成される。これまで海外からの借用資料の展示においては、欧米の気候条件（基準）をもとに、温度設定は年間とおして一八℃～二二℃に決められることが多かった。近年、保存科学において、環境問題への配慮から空調の費用対効果が問われるようになった。作品を安全に管理することは当然ながら、当該国の気候を考慮したうえで、どのような温度設定が現実的かつ持続可能な選択となるのだろうか。みんぱくでは、展示期間が夏から初秋という、もっとも暑い時期に重なる。そこで、外気温が高いうちは温度設定を二五℃とし、涼しくなるにつれて週に〇・五℃ずつ下げることにした。また、漆工芸など湿度の変動にとくに注意を要する作品においては、展示ケース内をアルミ箔（はく）で養生して密閉性を上げたうえで調湿剤を併用し、内部の湿度変動を抑える工夫をしている。

開館四〇周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」は、シーボルトが母国に残したコレクションの里帰り展である。シーボルトがどのように日本を展示しようとしていたのか、当時の先端をいくシーボルトの民族学博物館構想の一端にふれていただければと思う。

花鳥図衝立
アムステルダムでの展示を紹介した雑誌記事のイラスト中央に置かれた衝立
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

鳴滝の家屋模型
シーボルトが日本人門人を集めて講義をおこなった家屋の模型
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

展示ケース内の湿度を調湿剤とアルミ箔養生により一定にたもつ実検の様子（2017年）



フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著『日本からの公開状』
シーボルトとその長男アレクサンダー
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

観察された自然と文化のかたち

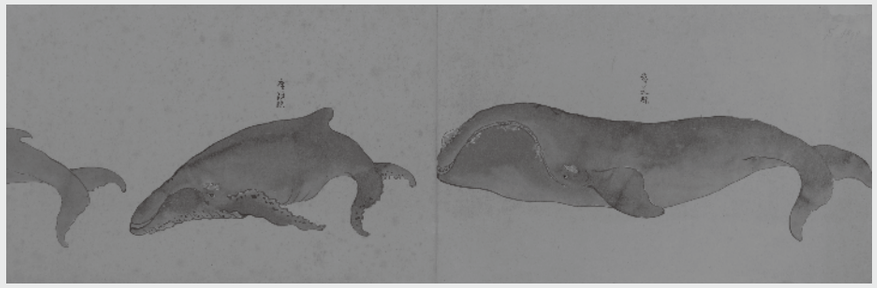
野林厚志
民博 学術資源研究開発センター

江戸の博物学ブーム

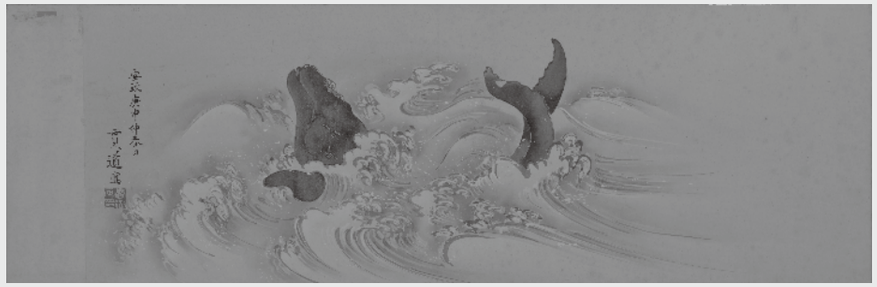
シーボルトは日本の動物学、植物学に大きな影響を与えた。これは、もちろんシーボルト自身に博物学的な素養や関心があったことが大きいが、同時に、シーボルトが滞在したころの日本が、少なからぬ人びとが博物学に興味をもっていた時代であったという時の利を得ていた。

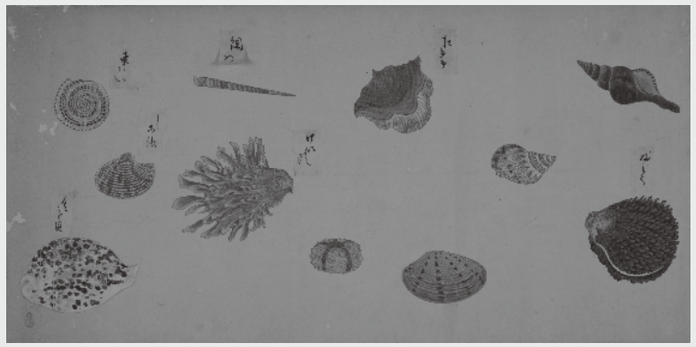
江戸の博物学ブームは、貝原益軒や稲若水といった人たちが中国の医学、薬学である本草学を、日本で普及、発展させた一七世紀後半を経て、一八世紀前半の享保の改革のころにおこなわれた物産調査がひとつのきっかけといわれている。日本内での産業が奨励され、各藩は地元でとれる生態資源、生産物を調べ上げていく。例えば、動物では、魚類、貝類、鳥類、獣類、虫類、蛇類の目録が作られることになる。その延長線上に自然の事物を記録していくという博物学的関心が高まったようである。

動植物体を標本資料として保存することがそれほどあたりまえではなかった当時の日本において、記録の中心になったのは絵画である。対象を視覚的に記録するための有効な方法だったからであろう。一八世紀半ばから盛んに描かれた「虫譜」とよばれる昆虫の図譜、中国から長崎を経由してもたらされた細密描法を駆使して描かれた「花鳥画」は、円山応挙や伊藤若冲らによる、今も我々を魅了してやまない芸術作品だけでなく、日本の動物相の実態や当時の動物観を知るうえで貴重な歴史資料となる生き物の図譜の礎となった。



鯨之図
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）





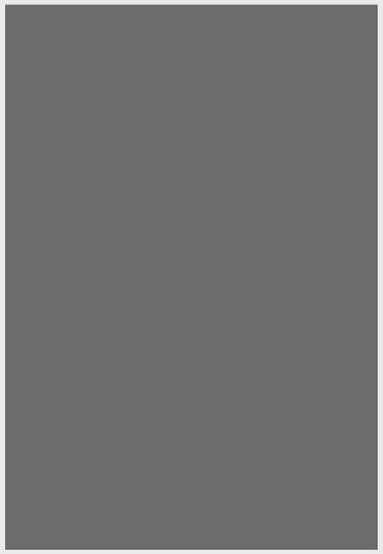
貝之図
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

シーボルトの博物学研究

こうした、日本における記述的、記載的な動物の記録のありかたと対照的であったのが、シーボルトの自然研究のアプローチである。シーボルトは形あるものに執着した。動植物の個体を買い求め、それらを研究用の標本や剥製にしたり、ときには飼育してオランダに送ったりした。これは、シーボルトの自然研究が、系統学、分類学という当時のヨーロッパにおける学問体系のなかで実践されていたことがひとつの理由であったのだろう。分類学は基本的には動植物の形態の比較研究をとおして進められる。実物標本はそうした研究のための一次資料として不可欠な存在となる。ちなみに、標本を収集し資料化するための費用は当時のオランダ領東インド総督府から日本における博物学研究費として支給されていたようである。

シーボルトが残した動物標本の収集記録は、当時の日本の動物の扱われ方を教えてくれる点でもじつに興味深い。日常的には長崎の出島での暮らしを余儀なくされたシーボルトは、一八二六年に、オランダ商館長が恒例の江戸参府をする際に医師として同行を許された。シーボルトは「稀なるくじを引き当てた」と大喜びしてこの貴重な旅に臨んだ。長崎以外の土地の自然を体験する絶好の機会だったからだ。果たして、シーボルトは普段は手にすることのできない数多くの動植物の資料を収集することができた。

帰り道の大阪では、ヤギ、カモシカ、クマ、雄シカ、サル、タヌキを生きたまま売る店があり、オオカミやヤマイヌを同じ店で買ったことがあるという記録を残していたりする。これらは「黒焼」、いわゆる滋養剤を販売する店であったと推測されているが、こうした野生動物が当時の大阪の市中で見られたことは、日本における人間と動物との関係を歴史的にとらえていくうえで大切な情報でもある。



シーボルト『日本』扉絵の原画
（フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン家蔵
Brandenstein-Zeppelin Family Archives）

さらけだされた日本の姿

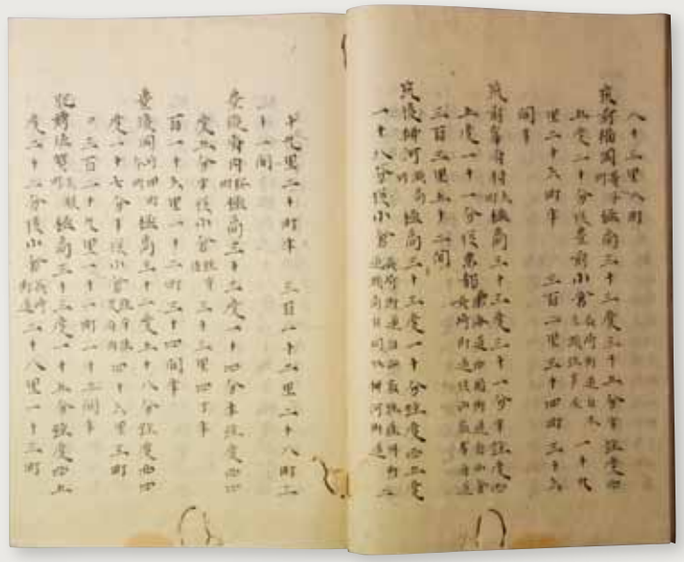
シーボルトは他の研究者と協力して後に一七年の歳月を重ねて、大著『日本動物誌』（ファウナ・ヤポニカ）を著すことになる。このためにシーボルトが懸命に収集した資料はじつに六四〇〇点あまりにおよぶ。それまで貧弱だといわれてきた日本の動物相がじつは豊富であることや先行の研究で報告されていたいくつかの動物種が実際には生息していないという指摘、新種の記載などが、シーボルト自らフィールドで確認した資料に基づいておこなわれた。日本の動物相が国際的な学界のなかで注目を集めるようになった転機ともなったのである。

動植物研究を進めるうえで、生体や標本といった実体のあるもの、実物にこだわったシーボルトは、日本に住む人びと、日本の文化をとらえるために、やはり形あるものにこだわったのかもしれない。ただし、当時のヨーロッパではいまだ人類学という学問は方法論を含めて成熟をみていなかった。そうしたなかで収集された資料から描かれた日本の「文化相」とはいったいどのようなものなのだろうか。その答えを見つけだすのも特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」の楽しみのひとつになるだろう。

※参考文献
上野益三著『日本動物学史』（八坂書房、一九八七年）
石山禎一他編『新・シーボルト研究』（八坂書房、二〇〇三年）

シーボルトが手に入れた日本の地理情報

青山宏夫（あおやま ひろお）　国立歴史民俗博物館教授



『地勢提要』に記載された北九州の諸都市（国立歴史民俗博物館蔵 H-110-5-89-1 秋岡武次郎古地図コレクションのうち『地勢提要』より。筆者撮影）

発見！シーボルト事件の日本地図

一八二八（文政一一）年、オランダ商館の医師としての仕事や日本調査の任務を終えて帰国の準備をすすめていたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、幕府天文方の高橋景保（かげやす）から手に入れた国家機密の日本地図を、国外にもち出そうとしていた。これが幕府の知るところとなって、その日本地図は没収されてしまう。現在、国立国会図書館に所蔵されている「カナ書き伊能（いのう）特別小図」は、その没収地図だとされている。だが、このときシーボルトはこれを密かに写しとり、ヨーロッパにもち帰っていた。従来の地図に比べて日本列島の形態が格段に正確になった日本地図を彼が刊行することができたのも、それによるところが大きい。しかし、これまで、シーボルトがこの日本地図を写したという確かな証拠は見つかっていなかった。

今回、国立歴史民俗博物館を中心にして実施した人間文化研究機構の共同研究で、シーボルトの末裔（まつえい）であるフォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家（ドイツ）に所蔵されているシーボルト自身の所持品のなかから、「カナ書き伊能特別小図」に関係する日本地図五点を発見することができた。なかでも、資料番号Krt-22（特別展で展示中）とKrt-26の二点は特に注目される。これらが「カナ書き伊能特別小図」の写しであることについては、特別展やその図録で実証している。詳しくはそちらに譲りたいが、ただここでは、その「カナ書き伊能特別小図」が、伊能忠敬（ただたか）によるいわゆる伊能図そのものではなく、高橋の手が加えられた編集図であることを確認しておきたい。とかく伊能図に目を奪われがちだが、シーボルトが手に入れた日本の地理情報には、高橋によって増補された情報が含まれていたのである。

緯度と経度の情報源

さて、Krt-22には、主要な都市のいくつかに地名とともに緯度と経度が記載されている。例えば、和歌山には「Wakajama 34°13′30″ 0°34′30″」とある。これは、和歌山の緯度が北緯三四度一三分三〇秒、経度が京都（西三条台改暦所）を零度としたときに西経零度三四分三〇秒であることを意味する。しかし、このような記載は、本来の伊能図にも「カナ書き伊能特別小図」にもない。

では、シーボルトはこの地理情報をどこから手に入れたのであろうか。じつは、伊能図には、これとセットになって幕府に提出された『大日本沿海実測録』という測量記録がある。これには、伊能が測量した道筋ごとに地名、里程、緯度などが収録されている。しかし、そこには経度の記載はない。ところが、高橋は、その測量記録から主要な都市を選び出し、街道ごとであるために錯綜（さくそう）していた記述を整理して、『地勢提要』（一八二四年跋（ばつ））を自らまとめていた。その際、伊能図を使って図上計測することによって、京都を零度とした経度を自ら割り出して収録していた。

いま、北九州の四都市について、Krt-22と『地勢提要』の記述を比べてみると、両者の数値は完全に一致する（表を参照）。たしかに、Krt-22には、岬や島嶼（とうしょ）などについては海上からでも計測できるために、ヨーロッパ人によって計測された緯度と経度が記載された地点もある。しかし、国内の主要な都市については、これら四都市以外でも、緯度と経度が『地勢提要』の数値と完全に一致する。つまり、シーボルトは、高橋の『地勢提要』に収録された緯度と経度を利用していたのだ。主要な都市だけが選び出され、記述が整理され、あらたに地理情報が付加されて編集された『地勢提要』は、シーボルトにとって有用だったにちがいない。

地理学者高橋景保の役割

このように、シーボルトが手に入れた日本の地理情報には、高橋が大きくかかわっていた。しかも、それは、国禁を犯してまでの行為であったとはいえ、地図を受け渡しただけの単なる仲介者にとどまるものではない。伊能図やその測量記録だけでは十分ではない地理情報を、高橋はむしろ主体的に補い、シーボルトはそれを実際に利用した。シーボルトが手に入れた日本の地理情報とは、地理学者高橋の所産でもあったのである。

Krt-22と『地勢提要』の比較

	Krt-22			『地勢提要』		
	地名	緯度	経度	地名	緯度（極高）	経度
福岡	Fukuwoka	33.35.30	5.20	福岡簀子町	三十三度三十五分半	西五度二十分
柳川	Janagawa	33.10	5.18.	柳河瀬高町	三十三度一十分	西五度一十八分
大分（府内）	Funai	33.°14　30.	4.5.30	府内桜町	三十三度一十四分半	西四度五分半
佐賀	Saga	33°15′ B	5°22′ L	佐賀呉服町	三十三度一十五分	西五度二十二分

※これら4都市の緯度と経度について、当時の計測地点の位置を考慮して現代の数値と比較すると、平均して緯度で約15秒、経度で約2分20秒の誤差がある。
距離にしてそれぞれ約450メートル、約3700メートル程度である。

佐賀／柳川

福岡

大分（府内）

Krt-22における北九州の4都市
（フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン家蔵
Brandenstein-Zeppelin Family Archives）

父と子が集めたアイヌコレクション

佐々木 史郎
国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹

シーボルト『NIPPON』「蝦夷　武器と道具」
（福岡県立図書館デジタルライブラリより）

館に収蔵されているが、その数は合わせると一〇〇点を超える。そして、一八五九（安政六）年～六二（文久二）年の第二回目の来日時にもわずかではあるがアイヌ資料を収集した。それらはドイツ、ミュンヘンの五大陸博物館（旧民族学博物館）に収蔵されている。彼の関心が江戸時代当時の日本文化にあったことは確かだが、同時代のアイヌ文化（当時の「蝦夷地」の文化）にも大きな関心をもっていた。

シーボルト、最初の収集

一回目の来日での収集は、ライデンの博物館に残されているものや彼の主著である『日本』（原著は一八三七年刊行）の記述から、かなり体系的なものだったことを知ることができる。例えば、その第七巻の一九図には、弓矢、矢筒のような狩猟用具、小刀、さじ、皿、椀などの食器、キセルとたばこ入れ、バスケット（ハマニンニクの茎をコイル状に編んだもの）や木製容器などの生活用具、捧酒箆（パスィ）や行器（シントコ）のような儀礼用具、そして樺太の五弦琴（トンコリ）のような楽器が描かれている（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、『日本　日本とその隣国、保護国――蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島――の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による。』、一九七九年、三五五ページ）。ライデンの国立民族学博物館にはアイヌの衣類なども収蔵されている。そこから彼が生業・生活用具から宗教用具や楽器に至

ミュンヘンにある五大陸博物館の正面（2003年）

るまで包括的に収集しようとしたことがわかる。また、彼がどこまで芸術性を求めて収集したかはわからないのだが、概して工芸品としての価値が高いものが多い。このときの収集品には蝦夷地探検で有名な最上徳内からの寄贈品が含まれている（ヨーゼフ・クライナー、「ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの歴史と現状」加藤九祚・小谷凱宣編『『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』（国立民族学博物館研究報告別冊五号）、一九八七年、四二八ページ）。

シーボルト、二度目の収集

幕末の二回目の来日時にアイヌ資料を収集した経緯は不明である。一回目の来日時の収集に比べると数は少なくて補遺といった意味合いが強い。特別展で紹介されているのはこのとき収集されたもので、樺太アイヌに特徴的なイラクサ繊維の上衣、オヒョウの樹皮繊維の前掛け、ネックレス状につなぎ合わされたガラス玉数連である。また、幕末の画家早坂文嶺がアイヌの人々の姿や活動を描いた絵画三点、北海道や千島列島、サハリンが含まれた幕末に刊行された地図もアイヌ関連の資料である。そのほかアイヌと関係があると思われる資料にはかごや笠、ハマニンニク製のバスケットなどもある。これらの資料は同じときに収集された日本資料とともに、ミュンヘンの五大陸博物館に収蔵されている。

イラクサ繊維の上衣（テタラペ）
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

ハインリッヒの収集

シーボルトのアイヌ文化への関心には、日本文化の民族学的な理解のための手がかりという意味合いがあった。それをより深化させたのが次男のハインリッヒ・フォン・シーボルトだった。ハインリッヒは在日オーストリア・ハンガリー帝国公使館職員として一八六九年の初来日から一八九六年に最終的に帰国するまで、兄のアレクサンダーとともに三〇年近くにわたって、日本とヨーロッパの国々との関係強化に貢献した。それと同時に日本文化の起源に関心をもち、大森貝塚の発掘に従事したほか、北海道でアイヌ資料の収集もおこない、日本に考古学や人類学、民族学を紹介するという役割もはたした。彼が収集した資料の多くはウィーンの世界文化博物館（旧民族学博物館）に収蔵されたが、そのなかに七〇～八〇点のアイヌ資料が含まれている。

早坂文嶺「蝦夷人家族図」
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

○○してみました世界のフィールド

タイ王国の展示を秋田へ

平井 京之介（ひらい きょうのすけ）
民博 超域フィールド科学研究部

美郷町歴史民俗資料館の民俗展示室

東南アジアについて研究・展示をおこなっている筆者。展示制作の協力を依頼され、秋田に向かった。タイと日本のかけ橋となろう文化展にみんぱくの収蔵資料をどのように活かせるか、秋田という地から考えてみた。

どうしてタイの展示なのか？

四月の終わり、秋田県中東部にある美郷（みさと）町という町を訪れた。今年一〇月にこちらの学友館で「タイ王国文化展（仮）」が予定されている。わたしはその展示制作に協力することになっていた。

どうして美郷町でタイ文化展なのか。美郷町は二〇二〇年東京オリンピックのホストタウンに一次登録されている。ホストタウンというのは、オリンピックをきっかけにして日本の自治体と大会参加国との交流を促そうというもので、美郷町の相手がタイのバドミントンチームなのだ。

ご存じない方のために、もう少し説明しよう。タイはバドミントンがけっこう強い。特に女子は、二〇二三年世界選手権シングルス金メダリストのラチャノック・インタノン選手を擁するなど、世界でもトップレベルだ。一方、秋田に本拠地を置く北都銀行バドミントン部は日本リーグ一部の強豪チームで、日本代表選手も所属している。かねてからタイのバドミントンチームと親交があり、これが縁で、今回美郷町のホストタウン登録が実現したという。

ここでぜひ強調しておきたい。オリンピックをきっかけに自治体が文化交流しようと考えるのはふつうである。だがその手段として展示を選ぶというのはかなり珍しい。博物館関係者としては涙が出る。

美郷という町

展示を使っての交流を成功させるには、展示される側だけでなく展示を見る美郷町の人びとのことも知っておく必要があるだろう。そこでまずは美郷町の歴史民俗資料館を案内してもらった。ここのわら細工展示室は圧巻である。五〇年くらい前のものだそうだが、精巧に作られていて、保存状態もかなりよい。その一部は秋田県指定有形民俗文化財になっている。民俗展示室には、小学生が描いた風景画を背景に、かつて町で使用された米作り道具が季節ごとに展示してあった。この地域の豊かな稲作文化を感じとることができる。

それから六郷地区の湧水群を見て回った。美郷町は扇状地にあり、地下水が豊富に湧き出る水の里として知られているという。町内に湧水が二六カ所あり、現在でも生活水として使われている。このきれいな水を利用して古くから酒造りがさかんだそうで、現在でも三つの蔵元が残っている。

同じ地区に寺町通りという通りがあり、通り沿いに二六の寺院が並んでいた。戦国時代に当地で町づくりをおこなった六郷氏は仏教を重んじ、寺院を手厚く保護したため、多くの寺院がよそから戦乱を逃れるなどして集まってきたという。現在でも町民の信仰心は篤（あつ）いとのことで、古くからの伝統行事もしっかりと残されているようだ。

展示の構想

さて、このような美郷町の方々に展示をとおしてタイの何が伝えられるか。これはかなりのチャレンジである。

美郷町は豊かな伝統文化をもっている。そして地元の歴史文化の教育にとても熱心だ。郷土文化と比較ができるようなタイ文化の展示ができないか。美郷町同様、タイは稲作がさかんであり、仏教に熱心である。熱帯のタイで水は重要なシンボルだ。こうした切り口から比較を促すことができれば、タイを知り、郷土を知ることにつながるのではないか。

宣伝になりますが、みんぱく特別協力の「タイ王国文化展（仮）」は一〇月二カ月だけの開催です。お近くの皆様、ぜひお越しください。

★日本、秋田

★タイ

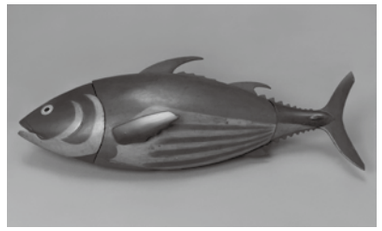
上：美郷町歴史民俗資料館のわら細工展示室
下：六郷地区の湧水群のひとつ、御台所清水

美郷町歴史民俗資料館の入り口に立つ鐘馗様（しょうきさま）
（掲載写真はすべて 2017 年に撮影）

開館40周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」

シーボルトが、終焉（しゅうえん）の地ミュンヘンに残したコレクションをとおし、民族学博物館の父とも呼べるシーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえります。

会期　8月10日（木）～10月10日（火）
会場　特別展示館



魚形蓋物（鰹）
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」

カナダは2017年に建国150周年を迎えます。同国と先住民との関係の変化に着目しながら、多様な先住民文化の歴史と現状、未来を紹介します。

会期　9月7日（木）～12月5日（火）
会場　本館企画展示場

■関連イベント

ワークショップ
10月1日（日）
「カナダ北西海岸先住民のワタリガラスの仮面を作ろう」
10月22日（日）
「カナダ先住民イヌイットのステンシル版画を作ろう」
時間　各日13時～15時30分（12時30分受付開始）
講師　田主誠（版画家）、岸上伸啓（本館 教授）
会場　本館第5セミナー室、本館企画展示場
※要事前申込（先着順／各日定員20名）、参加費500円、要展示観覧券

ギャラリートーク
日時　企画展開催期間中の月曜・木曜14時～
会場　企画展示場
※申込不要、要展示観覧券

開館40周年記念「エジプト映画『ヤギのアリーとイブラヒム』上映会」

本作をとおして、2011年の「アラブの春」以降、非常を日常として生きるエジプトの若者の現在について考えます。

日時　9月9日（土）13時30分～16時20分（13時開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんぱく映画会 第37回ワールドシネマ「おみおくりの作法」

孤独死を遂げた人を、できる限りの誠意を尽くして〝おみおくり〟する仕事に臨んできた民生係のジョンの姿をとおして、さまざまな人生を歩んできた人びとの尊厳ある生と死について考えます。

日時　9月18日（月・祝）13時30分～16時（13時開場）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんぱく秋の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス

秋の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時　8月22日（火）、25日（金）14時～16時30分
会場　本館第5セミナー室ほか
※参加無料
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。

お申し込み・お問い合わせ先
国立民族学博物館 案内所
電話　06・6878・8341（10時～17時）
Fax　06・6878・8441

みんぱくフェア開催

今年で開館40周年を迎える本館の紹介やミニ展示、楽器の体験など、各種企画を予定しています。

会期　9月1日（金）～9月30日（土）
会場　エキスポシティ内のインフォレストすいた

●みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通無料送迎バスを特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」の会期中に運行します。

運行日　8月10日（木）～10月10日（火）の土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

国立民族学博物館発

時	国立民族学博物館→万博記念公園駅
10	50
11	20
12	30
13	00　30
14	10　40
15	10　40
16	30
17	00

大阪モノレール
万博記念公園駅発

時	万博記念公園駅→国立民族学博物館
10	06　36
11	06　36
12	46
13	16　46
14	26　56
15	26　56
16	
17	

巡回展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」

会期　9月3日（日）まで
会場　石川県立歴史博物館
休館日　会期中無休
主催　石川県立歴史博物館、国立民族学博物館、千里文化財団

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial

お問い合わせ（本館 広報係）
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）

第471回8月19日（土）
シーボルトの日本展示と博物学
司会　園田直子（本館 教授）
講師　日高薫（国立歴史民俗博物館 教授）
　　野林厚志（本館 教授）

シーボルトは、日本の文化や自然に関わる膨大な資料をヨーロッパに持ち帰り、研究をすすめました。シーボルトの日本研究をコレクションで重要な位置をしめる漆工芸から、博物学研究を『日本動物誌』からさぐります。

扇散蒔絵箱（ミュンヘン五大陸博物館蔵）
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

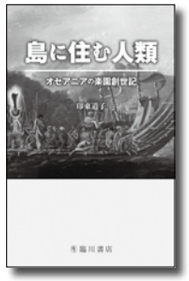
みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

8月6日（日）14時30分～15時15分　本館ナビひろば
変化するイタリアの結婚
話者　宇田川妙子（本館 准教授）
8月20日（日）14時30分～15時　本館ナビひろば
太平洋の探検家朝枝利男――その生涯と資料について
話者　丹羽典生（本館 准教授）
8月27日（日）14時30分～15時30分
本館第5セミナー室＋特別展示館
開館40周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」――みんぱくでの展示の工夫
話者　園田直子（本館 教授）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

刊行物紹介

■印東 道子 著
『島に住む人類――オセアニアの楽園創世記』
臨川書店　3,200円（税別）



大航海時代に「楽園」と称賛されたオセアニアの生活風景。魚は豊富でも狩猟採集で生活するのは難しい島環境を積極的に改変した人びと。自給生活の確立やネットワークを通じた助け合いなど、島で暮らす工夫が満載だ。世界の他地域の島とは異なる環境条件が、オセアニアの島文明の開化を支えていたこともよくわかる。

ビデオテーク新番組（2017年7月公開）

番組番号	種別	タイトル	時間
1747	短編番組	龍ヶ崎の撞舞：茨城県龍ヶ崎市	38分
1748		今治の継ぎ獅子：春祭りの獅子舞奉納	42分
1749		東湖八坂神社の統人行事：秋田県潟上市天王・男鹿市船越	35分
1750		新築祝い：雲南省回族の家屋落成式典	24分
1751		アラビア書道家：雲南省大理市南五里橋村の回族	27分
1752		回族の村の生活：雲南省大理盆地のイスラム教徒	12分
7239	研究用映像	ネパール　楽師の村　パトゥレチョールの現在	92分
6057	マルチメディア	息づく仮面：バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽	―

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）

会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※当日先着順、会員無料（会員証提示）、一般500円

第470回　9月2日（土）13時30分～14時40分
【特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」関連】
シーボルト父子が集めたアイヌ文化
講師　佐々木史郎
　　（国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹）

ドイツ人の医師・博物学者で、一九世紀に二度に渡って来日したシーボルト。彼の膨大な収集品の一部には、アイヌ文化に関する資料がありました。シーボルトが収集したアイヌ資料は、古さ、種類の多さ、日本を理解するうえで重要な要素になっていたであろう点で、大きな意味をもっています。そして、彼のアイヌ文化への関心は、次男のハインリッヒへと受け継がれていきました。親子二代に渡るシーボルト家のアイヌ資料収集についてご紹介します。

第471回　10月7日（土）13時30分～14時40分
【企画展「カナダ先住民の文化の力――過去、現在、未来」関連】
カナダ先住民と建国一五〇年――北西海岸先住民を事例に
講師　岸上伸啓（本館 教授）

建国一五〇年を迎える、多文化主義の国カナダ。この一五〇年は、先住民にとって、国家との政治的な対立と妥協を繰り返した時代でした。伝統的な生活から切り離されようとするなかで、先住民は一貫してそれらの継承や復興に努め、固有の権利を主張し続けてきました。一方で、先住民が欧米人と毛皮交易を行った結果、伝統的儀礼が大規模化したという例もあります。カナダ先住民の一五〇年を、北西海岸先住民の事例に照らして紹介します。

※両講演会とも、終了後に講師の案内のもと、展示見学会をおこないます（40分・一般参加は要観覧券）。

想像界の生物相

北尾重政・政美の描いた「白沢の図」

日本学術振興会特別研究員 PD（大阪府立大学）　佐々木 聡

資料名	『絵本荒獅山』（北尾重政筆）
資料 ID	F117000210
出版年	天明 7（1787）年
地域	日本
サイズ	縦 20.5㎝×横 14.3㎝

資料名	版画「白獏之図」（北尾政美画）
標本番号	H0277680
地域	日本
サイズ	縦 68.3㎝×横 11.7㎝

◆◆◆ 神獣・白沢と『白沢図』 ◆◆◆

『瑞応図』という書物によれば、黄帝という伝説の王が巡行のおり、白沢なる神獣と出会い、悪しきモノノケの禍から人びとを救うための知識を授かったのだという。この伝説により書かれたのが、モノノケの知識を詰め込んだ書物『白沢図』である。この本は北宋ごろまで現存していたが、後に散佚してしまい、近世ではもっぱら白沢そのものを絵に描いた「白沢の図」が用いられた。この白沢の図は、日本にも伝来し、特に江戸時代に広く流行した。家の壁や戸にかけるか、小さくたたんで懐中すれば、悪しきモノノケの禍から逃れられると信じられたのである。

［図 1］虎面鱗身の白沢（『大明会典』、国立公文書館所蔵正徳序刊本）

［図 2］龍面獣身の白沢（『三才図会』鳥獣 4、上海古籍出版、1988 年）

右頁右に掲げた北尾政美（一七六四～一八二四年）の摺り物（柱絵）もそうした江戸の白沢の図のひとつである。人面牛身に、額と両脇を合わせて九つの眼をもつという異形は、江戸で流行した典型的な白沢の姿である。本場中国では、虎面鱗身（図1参照）や龍面獣身（図2参照）で描かれることが多かったが、日本では江戸時代には人面牛身の白沢が広く親しまれた。

◆◆◆ 政美と白沢の図 ◆◆◆

北尾政美は鍬形蕙斎の名でも知られる浮世絵師であり、はじめ北尾重政に師事して、後に狩野惟信の門人となった。師の重政も若くして白沢を描いており（右頁左『絵本荒獅山』「白沢」）、後に一枚摺りでも売り出された。また、狩野派でも、白沢はよく描かれたモチーフであり、各人の作品のほか、伝・雪舟筆とされる模本なども残っている。政美もこうした先達に倣い、白沢の姿を描いたのだろう。

題記に篆書で「白獏之図」とあるのは、伝説上の動物である「獏」と「白沢」がしばしば同じものとされたことを踏まえ洒落でつけたものだろう。白楽天の「獏屏賛」に「その皮に寝れば瘟を辟け、その形を図けば邪を辟く」とあるように、獏もまた病や邪を退けるとされた。白沢＝獏という俗説もこうした辟邪獣としての共通点から生まれたのだろう。この説は江戸の随筆でもしばしばとり上げられたが、中国でも、例えば元の時代に熊忠が著した『古今韻会挙要』獏条に「今俗之（獏）を白沢と言う」などとある。

画賛は政美の作ではなく、元の類書『事林広記』からの抜粋だが、そこには怪異とそれを起こす鬼の名が列挙されている。もっとも怪異といっても、「蛇の人家に入る」や「狗の人屋に上る」など、日常的ではないが、稀にありそうな現象ばかりが並ぶ。これは現代語の「怪異」とは異なる語感かもしれないが、むしろ前近代の東アジアではこうした稀有な現象こそが怪異であり、大きな禍の前触れとして恐れられたのである。

末尾に述べる「凡そこの怪有れば則ち鬼の名を呼べ。その怪、忽ち自滅して地に入ること三尺。禍を転じて福と為す」とは、鬼の名を呼んでその禍や病から逃れるという古代の呪術であり、いにしえの元祖『白沢図』から受け継がれる辟邪思想の系譜を思わせる。

新世紀ミュージアム

良渚博物館
良渚博物院／中国

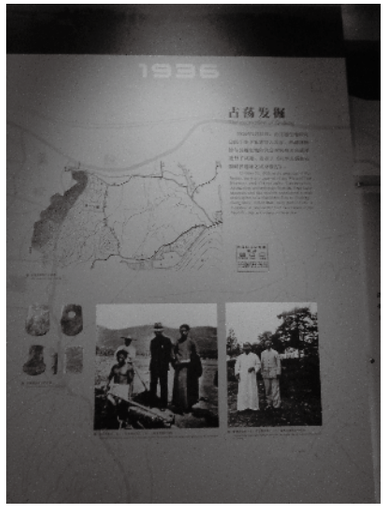
韓敏　民博 超域フィールド科学研究部

中国長江文明をになうとされる遺跡の上に建設された省立の良渚博物院。考古学調査の成果に基づいた展示をおこない、新石器時代の文化を学ぶ場として開館したこの博物館は、市民や他館と連携した活動を展開している。

良渚博物院は、浙江省の考古学博物館である（杭州市郊外）。良渚は町の名前であり、一九三六年に新石器時代の遺跡（紀元前三四〇〇年―同二二五〇年）として発見され、良渚文明発祥の地として知られている。遺跡区に建設されたこの博物館は、二〇〇八年九月にオープンし、敷地面積は四万平方メートル、展示面積は四〇〇〇平方メートルであり、収集、保存、研究、展示、教育の多機能をもっている。中国の大多数の国公立博物館と同じように、良渚博物院も見学無料で、毎年四〇万人が訪れる。常設展は考古学の研究成果を展示する「発現求真」、新石器時代の暮らしを再現する「良渚古国」と「良渚文明」の三つの部分からなる。

七〇年間の考古学研究の成果

「発現求真」は、発掘当時の新聞、写真、地図、陶器・石器などの発掘遺物をとおして、良渚遺跡の発見となる一九三六年の最初の発掘から二〇〇七年の城壁出土にいたる考古学調査の成果を展示したコーナーである。西湖博物館の施昕更氏が故郷の良渚で考古学的調査を三回おこない（一九三六年一二月―一九三七年三月）、発掘した石器、陶器と玉器を炭素一四法に基づいて測定したところ、五〇〇〇年前の遺物だったということがわかった。のちに『良渚――杭県第二区黒陶文化遺址初歩報告』（浙江省教育庁、一九三八年）を出版し、良渚遺跡と命名した。



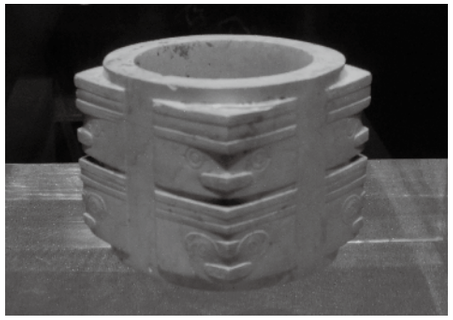
施昕更氏が1936年におこなった良渚での考古学調査の様子を示すパネル（掲載写真はすべて2016年に撮影）

この遺跡で五〇〇〇年もむかしに育まれた文化は、考古学者の夏鼐氏によって一九五九年に「良渚文化」と命名され、その後二〇〇七年の良渚古城と集落の遺跡の発掘を経て、後継の研究者らによって「良渚文明」とよぶべきものであるという学説が提起された。展示場のジオラマからは、良渚遺跡が東西一五〇〇―一七〇〇メートル、南北一八〇〇―一九〇〇メートルの囲壁と、二九〇万平方メートルの面積をもつ中国最大の古代都市遺跡であることがわかる。水利施設群、祭壇と城壁をもつ古代都市遺跡であることが確認されただけではなく、良渚文化は河姆渡文化（紀元前五〇〇〇年―同四五〇〇年）の後に続く、長江デルタの新石器文化であり、長江文明の一部をになうものであることがわかり、中国史像全体の見直しを迫るものとなった。

暮らしの再現展示

「良渚古国」コーナーでは、絹、漆器、玉器といった資料に加え、農耕、漁猟、料理、木材加工、家作りのための道具も展示している。政治的中心とされる莫角山の祭壇を建設した当時の再現模型には、高みに男性の首長と妻であろう女性が立ち、その後ろに従者がひかえ、指示を与え、人びとが建設に励む姿や武器を携えた兵士の姿もみられる。これらにより、五〇〇〇年前の人類社会の分業や階層化と人びとの暮らしがわかるようになっている。

「良渚文明」コーナーでは、良渚遺跡で発掘された遺物のなかでも特に優れたものとされる玉琮、璧（祭祀用あるいは威信財。円盤状で、中心に円孔をもつ）、鉞（権威の象徴である大型の斧）の玉器が展示されている。玉器には、可愛い亀や小鳥の装飾があるものもあれば、神人獣面紋があるものもある。当館の学芸員によると、琮には一段から十段を超えるものまである。玉琮の使い方はまだ不明だが、一説では地を祀る、あるいは祈願の道具として使われたようである。いずれにしても大量の玉器の出土は、良渚文明の特徴としてみなされている。また、長江文明の一部である良渚文明は東北の遼河文明、華北の黄河文明と同様、中華文明をになうものであると同時に、同じ新石器時代の古代エジプト文明、シュメール文明、ハラッパー文明を含む都市文明のひとつとして説明されている。


2段の玉琮の四隅には神人獣面紋の線刻装飾がなされている（良渚遺跡から出土）

他施設や市民との連携

常設展のほかに随時、特別展も開催される。筆者が見学した商周時代（紀元前一六〇〇年―同二五六年）の青銅器の特別展（河南博物院出品）はそのひとつである。来館者は黄河流域で出土した巨大な青銅器に圧倒されていた。案内してくれた学芸員の話によると、河南博物院のリニューアルによる一時閉館を利用して、良渚博物院は今回の特別展を企画したとのことである。休館期間を利用して他の博物館と連携展示をすることは、民博の展示を考えるうえでも参考になるだろう。

社会連携に関する工夫として、まず「国際博物館の日」（五月一八日）が設定されていることがあげられる。「国際博物館の日」とは、博物館の社会的な重要性についての普及啓発をおこなうことを目的として国際博物館会議（ICOM）が一九七七年に提唱したものである。良渚博物院は、毎年の五月を「ミュージアムマンス」とし、周辺の学校、広場、町内会などに出前のミニ展示と授業をおこなう。

また多くの市民に親しんでもらうために、良渚博物院は八名の専属解説員以外に、市民や大学生から解説ボランティアも募集している。研修を受けて合格した人が、来館者に案内解説をおこなう。学芸員の陳さんもかつてここの志願者だった。浙江省の浙江交通職業技術学院に在籍していたころの彼は、来館者に解説しているうちに博物館の仕事に生きがいを感じるようになり、卒業の後ここに就職したのである。ボランティアによるガイドツアーは、市民と博物館をつなげる魅力的なしくみであるといえよう。

特別展にて、学芸員の陳さんがボランティア志願者に解説をおこなっている

震災と手芸とコミュニティと

塩本（しおもと） 美紀（みき）
特定非営利活動法人ウィメンズアイ副代表

東日本大震災から六年。震災後に宮城県気仙沼市や南三陸町で生まれた手芸サークルは、今も女性たちで賑（にぎ）わっている。震災で傷つき孤独を感じたときも、癒しとなったのは編み物であり、手芸でつながる絆（きずな）であった。

気仙沼生活支援プロジェクトKでの講座（2013年2月、内田綾撮影）

二〇一三年春、気仙沼。編み物講座開始前の会場はそれはにぎやかだった。おなじみのお母さんたちは平均年齢六十代なかば。この見せ合いっこの時間が楽しく、集まる時間がどんどん早くなっていた。

「夜中、目が覚めるのが怖くて。一度、目が覚めるといろんなことを思い出して考えて眠れない。でも、そのとき『あ、編み物があった』と思う。夜中でも引っ張りだして編むんだよ」。当時、編み物講座に参加してくれていた女性のことばだ。

東日本大震災直後の二〇一一年初夏、精神的なショックから気仙沼の避難所で起き上がれなくなっていた八〇歳のMさんに、妹さんがカラフルな毛糸とかぎ針、編み物雑誌を差し入れてくれた。可愛らしいバラの形のエコたわしがやる気スイッチを入れ、Mさんは編み物で少しずつ元気をとり戻してきた。聞きとりに伺ったスタッフにそう語ったMさんは、お土産にとエコたわしをもたせてくれた。

バラのエコたわしを編む講座、まだ緊張感が漂っている（2012年1月、内田綾撮影）

編み物があってよかった

「ほれ、こないだの残りで作ってみたっちゃ」
「わあ、この前のもいいけど、それもいいねえ」
「どれどれ、んまあ、かわいいごど」
「作り方教えてけろ」

編み物など手を使う作業はストレスケアとなり、心に傷を受けた人の助けになるという。Mさんの話そのものだ。三陸沿岸ではちょうど、人びとが避難所から仮設住宅に移る時期だった。仮設住宅に居残りがちなシニア女性たちに手芸で楽しみを作り、元気づけ、温かい人のつながりを生むことができたら。これが、テーマによってコミュニティをつくる「お楽しみ講座」のきっかけだった。

講座では、カラフルな毛糸で、ほぼ二時間で完成する作品を作る。参加者に編み物が上手な人がいたら、教える側を手伝ってもらう。参加者のあいだで「こんなふうに集まったらいいっちゃね」と話がまとまれば、自主開催をお勧めし、毛糸や編み図をときどき届ける。方針が決まると、そこからはボランティアが毛糸の山と編み図をもって走り回った。だが、思うほど簡単に進んだわけではなかった。

手芸が人をつなぐまで

冒頭の会場で講座がはじまったころ、参加者同士が目を合わせないのが印象的だった。毎回決まった席に座ると、毛糸と編み図を受けとるや黙々と編み続け、時間がきたらさっと帰る。何カ月間もずっと背中合わせで編んでいた二人がじつはいとこ同士だったと後から気づいたという出来事もあった。

被災による個々の心の傷はもちろん大きかった。だが、場に緊張感を作っていたのは、被災の状況や支援の差が明らかになることで、不用意に感情的なことばが生まれ傷つけ合ってしまうことのようだった。この時期、編んだものを販売してはという話が舞い込んだことも心をざわつかせた。お金が絡む事がらは人それぞれに思いが違う。

しんとした講座。でも、この編み物の日をどんなに楽しみにしているか、こっそり伝えてくれる参加者たちがいた。「無理に話をしなくてもいいから、来られる」。一カ月、半年、一年、回を重ねるごとに空気が柔らかくなっていった。地元団体スタッフの心配りも大きかった。人が自分らしくいられる、安心な場になるには時間と手間がかかる。

南三陸町歌津、刺し子サークルのひとこま（2017年5月、栗林美知子撮影）

非日常から日常のコミュニティへ

ときは流れ、二〇一七年春、南三陸。定休日の美容院の一画はシニア女性たちの元気な声でいっぱいだった。支援の刺繍（ししゅう）講座から生まれた刺し子サークルは毎月二回のペースで続き、みんなの刺し子の腕もみるみる上がっている。机に作品を並べての見せ合いっこはいつかみた光景と同じ。知らない人に「素敵なバッグ、どこで買ったんですか？」と聞かれて誇らしかったそうだ。

ここは刺し子が好きになった人たちが大事に作ってきた居場所だ。隣町に引っ越した女性も楽しみに通っている。新しく仲間に加わる人もいる。夢中で刺して、残り一五分はもち寄ったお茶うけでおしゃべり大会。たわいのない話もできる。こうした日常のコミュニティがいくつもあることが、地域で暮らす人びとの幸せにつながっていると感じる。そして、この場を自ら作った経験と人のつながりがきっと、いつか訪れうる災害時の力になるとも思うのだ。

それも言語学者の仕事なの?

What's in a name?

早稲田(わせだ) みか　大阪大学教授

イギリスは『デイリー・テレグラフ』紙のニュースサイトに、こんな見出しの記事があった。いわく、「ハンガリーについてあなたの知らない二五の驚くべきこと」。温泉が豊富にある、ノーベル賞受賞者が多い、ハンガリー語は世界でもっともむずかしい言語のひとつである、などにまじって、「ハンガリー人の名前は法律で規制されている」とある。

なるほど、ハンガリー人の名前(ここではファーストネーム。ちなみに、ハンガリー語では、人名は日本語と同じく、姓・名の順にしるす)は、日本人のそれにくらべるとヴァリエーションが少ない。というのも、生まれた子どもに付ける名前は、法律により、原則として既存の名前のリストのなかから選ぶことになっているからだ。使用する漢字に制限こそあるものの、最近のキラキラネームにみられるように、基本的には自由に名前を付けることができる日本とはおおちがいである。

この名前のリストを決めているのはハンガリー科学アカデミーである。リストは『名前の本』という書籍にもなっているし、科学アカデミー言語学研究所のホームページには名前を検索できるデータベースもある(http://corpus.nytud.hu/utonevportal/[ハンガリー語のみ])。

このデータベースに載っていない名前を戸籍に登録したい場合には、担当の役所に許可の申請をしなければならない。役所は言語学研究所に検討を依頼し、言語学者からなる委員会が組織されて、専門的な意見が求められる。

ハンガリー人と結婚してハンガリーで暮らしている日本人の知人に孫が生まれた。ふたつまで名前をもつことが法律で認められているので、そのひとつとして、「ななえ」という日本語の名前を付けたいと、申請した。言語学研究所でこの名前の妥当性を検討したのが、これまた知人の日本語研究者だった。

判断の基準は、日本語由来の名前の場合、それが日本語でも一般的に使用されていること、女性の名前なのか、男性の名前なのかが容易に判別できること、ハンガリー語の正書法にしたがって発音されること、ハンガリー語の構造に合致していること、などである。ハンガリー語では女性の名前と男性の名前がはっきりと区別されており、法律でも「子どもの性に適した名前を付ける」と明示されている。「ななえ」にはなんの問題もなく、申請はめでたく認められた。一度認可された名前は、これも法律で定められているのだが、科学アカデミーのホームページ上で公表することになっている。先述のデータベースにも、〝Nanae〟は女性の名前としてちゃんと登録されている。

日本通のハンガリー人が自分の子どもに「みきお(Mikio)」という名前を申請したときには、ハンガリー語には語末が短い〝o〟でおわる語は存在しないという音韻構造上の制約があるため、かわりに長母音〝ó〟を使用した〝Mikió(みきぉー)〟という語形を提案し、これが認められたという。

結婚後の女性の姓名については、ハンガリーでは旧姓のままも含めて五通りの選択肢があるが、子の名付けに関しては、日本の方が自由度が高いといえようか。

月刊みんぱく 2017 8月号

編集後記

本館は、「みんぱく」と親しみを込めて呼ばれている。正式に書くと「国立民族学博物館」となるように、民族学を中心とする研究所である。18世紀末に生を受けたシーボルトは日本において民族学的な資料の収集をおこない、そのコレクションから日本博物館を開設した。「民族学」と「博物館」というキーワードを介して、いわば本館とシーボルトはつながるわけである。本号では、そうした彼の日本博物館が150年ぶりによみがえる特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」と連動する特集を組んだ。民族学や博物館のありようは、シーボルトの時代から大きな変化を遂げている。40周年という節目を迎えた年に当館で開催されるのも何かの縁であろう。個人的には、本展示を通じて時代や学問の変化を見返すとともに、民族学博物館の将来について考える機会としたい。（丹羽典生）

●表紙：フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著『日本からの公開状』
シーボルトとその長男アレクサンダー
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

次号の予告

特集

企画展「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」関連

みんぱくをもっと楽しみたい人のために——会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

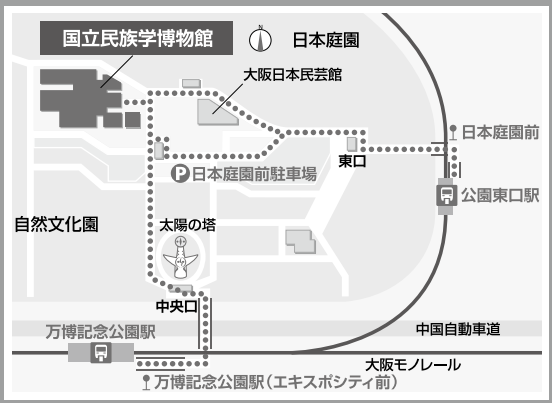
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00～17：00）

月刊みんぱく 2017年8月号
第41巻第8号通巻第479号　2017年8月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　丹羽典生（編集長）　寺村裕史　三島禎子
南真木人　山中由里子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
https://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
https://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology